

学校法人城西大学理事長
水田宗子の人生ノート

「偽らず、欺かず、諂わず」

第1章 私の原点、父、水田三喜男

学校法人城西大学は、わが埼玉県の坂戸に1965(昭和40)年創立、今年で45周年を迎える。今や城西大学、城西国際大学、城西短期大学の2大学1短大に12学部16学科、2大学院8研究科、2別科があり、既に約8万人の人材を世に送り出し、地域社会にも大きく貢献、急がれるグローバル教育ではすでに国内外の定評を得ている。

そのトップは、高名な比較文学者、女性学研究者、文学評論家、そして詩人でもある、水田宗子理事長だ。戦後復興に政治生命を賭した創立者・水田三喜男氏の次女にして、アメリカで24年間学び教え帰国、その異能を城西に注ぎ込んで四半世紀を支えてきた。そして、「私立大学は人間塾」と学生を我が子のように慈しむ。初めて語る、父から受け継いだ「偽(いつらわ)らず、欺(あざむ)かず、諂(へつら)わず」の人生には、人間性も豊かな熱いメッセージがあふれている。

水田の名前は宗子、「のりこ」だったので、第二子は「こ」と読む。水田が母・清子 きれは男を、と念じていたら(せいこ)から聞いたところ、しい。そのせい、家を継ぐでは、父・三喜男は、第一子 男の子によくつけられる「宗」が二つ上の姉・整子(よし)の字を用意していたといっ

①

ところが、また女の子だった。「父はがっかりしたといふ話も残っていますが、その8年間にわたる日中戦争故か、女らしくというよりは元気が良く、活発で明るい子であるように育てられたと思います」。水田は笑う。

そこには、時代も大きくかわっていた。1937(昭和12)年8月19日、ちょうど正午だった。水田は東京市の大森馬込で生

を受けている。折しも、直前の7月7日に蘆溝橋事件が起きた。父はがっかりしたといふ話も残っていますが、この8年間にわたる日中戦争に突入した。時代は一変。戦時下である。幼児期の水田もその暗く重い世相の中に容赦なく引きずり込まれていっ

た。その7月7日に蘆溝橋事件が起きた。父はがっかりしたといふ話も残っていますが、この8年間にわたる日中戦争に突入した。時代は一変。戦時下である。幼児期の水田もその暗く重い世相の中に容赦なく引きずり込まれていっ

うな我が家ではなかった。7月7日に蘆溝橋事件が起きた。父はがっかりしたといふ話も残っていますが、この8年間にわたる日中戦争に突入した。時代は一変。戦時下である。幼児期の水田もその暗く重い世相の中に容赦なく引きずり込まれていっ

た。その7月7日に蘆溝橋事件が起きた。父はがっかりしたといふ話も残っていますが、この8年間にわたる日中戦争に突入した。時代は一変。戦時下である。幼児期の水田もその暗く重い世相の中に容赦なく引きずり込まれていっ

違つ日本になつていたので。戦争はますます激しくなつていきましたから、私の幼児期から子供時代は、おもしろいお菓子はあつたか、人形やおもちゃ、衣服はもちろん、土産に沢山のチョコレートをく

た。その7月7日に蘆溝橋事件が起きた。父はがっかりしたといふ話も残っていますが、この8年間にわたる日中戦争に突入した。時代は一変。戦時下である。幼児期の水田もその暗く重い世相の中に容赦なく引きずり込まれていっ

というたくましさを感じていった。わけても疎開は、「その後の人生の原点になつた」といふ。1941(昭和16)年、太平洋戦争突入。水田が東京生活を続けられたのは5歳まで。その後は父の郷里である千葉県安房郡曾根(そろ)村(現・鴨川市)と同じ郡内に

た。その7月7日に蘆溝橋事件が起きた。父はがっかりしたといふ話も残っていますが、この8年間にわたる日中戦争に突入した。時代は一変。戦時下である。幼児期の水田もその暗く重い世相の中に容赦なく引きずり込まれていっ

水田三喜男の次女として



戦後を代表する政治家水田三喜男は人間性豊かな人でもあった

トトなど買つてもらつたことではない。姉妹で差別されたわけではない。水田もまた、そんな甘えかけではないが、平和から戦時下へとたつた2年半でまるで



水田 宗子 (みずた・のりこ) 1970年、米国イェール大学博士号取得。米国スクリッps大学、南カリフォルニア大学を経て、城西大学副学長、学長を歴任。1998年から2009年まで城西国際大学学長、2004年より学校法人城西大学理事長に就任し現在に至る。著書に「ヒロインからヒーローへ」 「二十世紀の女性と文化」 「ジェンダーで読む<韓流>文化の現在」 詩集に「帰路」など多数ある。

【おとわり】 水田三喜男氏の記述中、各氏から追想集刊行の際にご寄稿賜りました逸話を引用させていただいておきます。執筆の意図を最大限くまらせていただくために、各氏の肩書や、その後お亡くなりになられた方々の御氏名にあえて「故」をお付けしないなど、すべて刊行時のままといたしました。

「浜の子らと同じ荒つぽい尻尾で自分を「おれ」などといつて、裸足で駆け回つて一日中遊び放題、そんな私を父や母もかえつて楽しんでくれる様子でした」。すこぶる安産で母親の笑顔とともに産声を上げたといふ水田。大切にされすぎて体も弱かつた姉とは対照的に丈夫な体に恵まれた。「きつと放つておいても大丈夫だと思つていたのでしよう」 長じて水田は自らの意思と行動でアメリカに留学し家庭を持ち、教育者となつて、今、学校法人城西大学を任されている。思えば、宗子という名の通りの人生だった。(連載の取材・執筆は編集委員・齋藤柳光が担当します。2回目以降は原則、経済面で掲載します)